

食料自給率向上の罣

世界の主要穀物生産国の今年の生産量予想によると、5月末の小麦在庫量は、2002年以来、最大値を記録するという。対して、日本の「食料・農業・農村基本計画」（3月末、閣議決定）には、「世界の食料生産の増加は困難」との見通しが記され、世界で唯一、穀物の計画経済指標を強化する方針が示されている。

本誌副編集長

浅川芳裕

第21回

「世界の食料生産の増加は困難」 （新食料・農業・農村基本計画）の大ハズレ！

米国農務省を筆頭に、世界の主要穀物生産国の今年の生産量予想が出そろった。

農水省の穀物需給ひっ迫予想をよそに、「5月末の世界の小麦在庫量は、1億9582万tで、需要の29・7%まで積みあがっている」（米国農務省）。これは2002年以来、最大の在庫量だ。豪州とロシアが2年つづけて、30%超の増産をしたのが主要因である。米国単体の期末在庫率では47・3%と過剰な積み増し状況にある。

過剰在庫を受け、シカゴ先物取引所は最安値を記録した1993年以来、もつとも弱気相場になっている。2010年の第一四半期の小麦先物価格は、ここ15年で最低価格を記録

した。「8月ごろまでにブッシェル当たり4ドル（kg当たり14円）、景気が悪化すれば最悪で3・5ドル（同12円）まで低下する」（コモディティ情報システム社）との予測もある。

米国では小麦作付面積が今期、過去40年で史上最低になる見込みだ。農家は価格下落が予想される小麦から、トウモロコシや大豆に作付けを移行している。小麦の作付面積は5383万エーカーで、09年に比べ10%近くも下降し、トウモロコシの面積は3%増、大豆は1%増となっている。

この減産予想を反映して、「先3カ月の先物価格はブッシェル当たり5ドル（同17円）で推移し、10月頃には5・5ドル、年内には6ドル（同

20円）まで上昇する」（ゴールドマンサックス社）との楽観的な見方もある。ただし、米国農務省の試算では、すべての米国農家が今年、仮に小麦の生産をゼロにしたとしても、世界の小麦供給量は現状の在庫水準と他国の生産見込みからすると、需要を21%も超えてしまうという。3年連続で世界の生産量が消費を上回り、需給が大幅に逆転しているのだ。

07年に小麦価格が従来約2倍になったことに刺激を受け、世界中で増産され、09年には、史上最高の年間6億8300万tが生産された。これまで6億t前後だった生産量が、わずか1年で8000万tも増えたのだ。これは、日本の小麦生産量の100倍、輸入量の15倍に相当する。

世界のこうした生産余力をみると、日本の農水省が自給率向上政策の根拠とする「単収の伸び率低下と収穫面積の拡大の限界により、世界の食料生産の増加は困難」と断定する見解が、いかに現実離れしているかがよくわかる。

小麦の在庫量は史上最高予測

EUにおいては、期末の在庫量は1900万tに達する見込みで、ここ5年で最高の水準まで積み上がる。EUの小麦生産量は今年、昨年比で作付面積は減少したが、4・1%増の1億4450万tと予想されている。07年の史上最高の1億5100万tに迫るとの予測もある。「アイルランドの火山噴火の悪影響よりも、

現段階では、昨冬は積雪の多さが小麦の生育に好影響を与えた要因のほうが大い」と専門家は話す。

輸出については、仏独をはじめEU諸国からの大きな伸びが予想されている。ユーロ安に加え、昨年豊作だった北アフリカの減産の見通しからだ。

世界の趨勢をみれば、小麦輸出の勝ち組はロシアだ。小麦の世界貿易はここ10年で25%伸長しているが、その70%をロシアが奪っている。長年、1000万~1500万tほどの小麦輸入大国だったロシアが、米国の現実的なライバルとして君臨しはじめています。

米国の小麦輸出シェアは08年に最大29%を誇ったが、今年は過去50年で最低の19%になる見通しだ。ロシアが14%、豪州が干ばつだった2年前の2倍に相当する12%と見込まれている。ロシアは05年800万tだった輸出量が、09年には1600万tと5年間で倍増している。

5月現在、ロシア産の価格がt当たり167ドルに対し、米産が180ドルで、長年、米国にとって中東最大の買い手であった新興国エジプトがロシア産にシフトしているとのレポートもある。

さらには、「2019年までに米国はロシアに『世界一の小麦輸出大国』

の座を譲り渡すことになるだろう」（米国農務省）との観測もある。

ロシアの小麦競争力向上の要因はさまざまあるが、最大の理由は長年の計画経済の失敗による生産性減退から、市場経済に移行したことにある（詳細は次号に記す）。

対する日本の小麦生産量は、09年、前年比23%と激減した。生産性を高める世界の趨勢に反して、収量減が理由だ。今期の作付け予測は現在、不明で、農水省が発表するのは毎年10月である。世界の情報スピードから完全に取り残されている。世界の農業界は年初から2011年の在庫率の予想をしているのに、農水省は3月後半になってやっと09年の小麦生産量を発表するという遅さだ。さらには、社会主義の老家ロシアでさえ廃止したにもかかわらず、世界で唯一、穀物の計画経済指標を強化している。コメ、麦、大豆の2020年、2030年までの長期的な増産による自給率向上目標を3月末に制定したばかりだ（食料・農業・農村基本計画の閣議決定）。

大豆、トウモロコシにも過剰状況

世界の生産勢力図はマーケットに対応して刻々と変化している。

ブラジルは5月、「2010年の穀物生産量は、07年の史上最高水準を

超える見込みだ」（ブラジル農業家畜食料供給大臣）と発表した。「ブラジル農業界の生産性の向上の賜物だ。安定した降雨量も功を奏している。農業大国として、世界の必須食料の供給をリードしていきたい」（同）と勢いが止まらない。

その生産量は前年比6・5%増の1億4400万tが見込まれ、トウモロコシの生産は、前年比140万t増の5700万tと見込まれている。穀物生産の半分を占める大豆生産量は、6757万tと予想され、前年比18・2%の伸びが期待されている。

米国でも大豆は史上最大の7810万エーカーの作付けが予想されている。

米国の穀物地帯は4月、5月とまれにみる暖春に恵まれ、作付けが順調すぎるほど進んでいる。止まることのない農機の大規模化も早期植え付けに影響している。早期作付けは生育期を延長でき、一般に収量を伸ばせることになり、天候がそのまま順調に推移すれば、史上最大の生産量になるだろう。生産量増の要因には、増反だけでなく、GM種子の性能向上による増収も織り込まれている。

トウモロコシの作付けも順調だ。面積は前年比3%増の8880万エーカーが見込まれている。これまで

トウモロコシと大豆の交互輪作が一般的だった農家でも、現状、収益がより高いトウモロコシの連作が増えているのも一因だ。

大豆と同様、早期作付け増反を促した。全米で通常は5月上旬に2割ほどしか完了しないトウモロコシの作付けが半分以上完了している。コーンベルトの大産地のひとつ、イリノイ州では昨年、この時期に5%しか作付けを終えていなかったのが、今年は9割がすでに植わっているという。

「今年からしばらくは需給バランスが完全に逆転すると言って差しつかないだろう」（シカゴのアグ・リソース社のコモディティアナリスト）

ほかの専門家は、「海外の食用需要と国内エタノール産業需要増による価格急騰で08年に一度大儲けしたのも束の間で、米国の農家は使いきれないほどの過剰生産と価格の低迷に苦しむ元の時代により戻されてしまった」と分析する。

5月の大豆先物価格はブッシェル当たり9・38ドル（同32円）で36セント下落、トウモロコシも8セント下落の3・46ドル（同12円）と下降傾向にある。

大豆の在庫量は12億7000万ブッシェルで、需要量を6000万ブッシェル上回る過剰状況だ。